

第 33 回麻布環境科学研究会 一般演題 5

生物多様性の保全・ESD・実践コミュニティ 準限界集落「青根」での実践活動

村山 史世

麻布大学 地域環境研究室

1. はじめに

昨年の環境科学研究会では、相模原市内での過疎・少子高齢化の準限界集落「青根」の休耕田から復活させた水田を拠点に生物多様性に焦点を当てた環境まちづくりの実践を紹介した。

今回は、生物多様性の保全、環境教育を中心とした「持続可能な開発のための教育（ESD）」、そして実践コミュニティをキーワードに青根での環境まちづくりについての現時点までの実践報告を行う。

2. 生物多様性の保全

われわれの活動グループ「あざおね社中」は、活動続ける際に水田や青根小学校の学校林を拠点として生き物の記録をとり続けてきた。その結果絶滅危惧種の昆虫をはじめ、多くの生き物を発見することが出来た。

調査においては相模原市立博物館との連携も行い、動植物の調査の受け入れも実施した。

また、環境省が進めるモニタリングサイト 1000 里地調査（重要生態系監視地域モニタリング推進事業）にも参加し、アカガエル類、カヤネズミ、水環境、人為的インパクトの調査も行っている。

アカガエルの調査データを基に、青根中学校あるいは青根小学校にアカガエルのための学校ビオトープを造成する資金をかながわトラスト財団から得た。

また、生物多様性の調査と自然かんさつ会・環境教育を実施して、生物多様性的な価値を再発見・地域と共有するための資金をタカラ・ハーモニストファンドから得て、現在調査と自然かんさつ会、環境教育活動を展開している。

3. ESD

あざおね社中の環境学習要綱には、あざおね社中は実施する環境教育は ESD であることを宣言している。

ESD には「多様性」「相互性」「有限性」「公平性」「連携性」「責任性」の 6 つの構成概念、「批判的に考える力」「未来を予測して計画を立てる力」「多面的、総合的に考える力」「コミュニケーションを行う力」「他者と協力する態度」「つながりを尊重する態度」「すすんで参加する態度」の 7 つの伸ばしたい力・態度があるとされている。ESD の構成概念および伸ばしたい力・態度を分析すると、ESD はコミュニティの存在を前提として、コミュニティへの参画を促進するような教育観を持っていることがわかる。それは従来教育の目的について、個人の能力の開発（個人主義）か、国家に必要な人材の養成（国家主義）かの二者択一的に論じられていたこととは違っている。言わば、private から public から区別された common の領域、すなわちコミュニティに参画し、コミュニティをよりよくしてゆく力の涵養も意図している。

なお、本年度は環境省の推進する「持続可能な地域づくりを担う人材育成事業に係る ESD 環境教育プログラム」の神奈川事務局を麻布大学が担うことが予定されている。青根での実践を基に、ESD を展開してゆく。

4. 実践コミュニティ

生物多様性の保全は、地域コミュニティの課題であって、個人や国家だけで解決できる課題ではない。地域コミュニティが科学的に生物多様性的価値を把握し、具体的な行動をすることによって解決を図ってゆ

くべきである。

ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーⁱは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続的な相互交流を通じて深めてゆく人々の集団」を「実践コミュニティ」と呼んだ。地域課題の担い手は、まさにこのような実践コミュニティであると言える。

あざおね社中も麻布大学の学生を中核とした実践コミュニティである。あざおね社中は青根地域の自治会はじめ多くの主体、すなわち地域の実践コミュニティに影響を与えて、地域コミュニティの変容に寄与している。

このような取組はまさに ESD であるとも言える。

ⁱ Jean Lave & Etienne Wenger, “Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation”, Cambridge University Press (1991) (邦訳ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガー著／佐伯胖・福島真人訳 (1993)『状況に埋め込まれた学習-正統的周辺参加』産業図書株式会社)